
D.C.?.E.F.~ダ・カーポ?.エターナル・フォーエバー

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・?・E・F ｝ダ・カーポ?・エターナル・フォーエバー

【Nコード】

N4875M

【作者名】

橘天龍

【あらすじ】

混濁した意識の中、俺を呼び掛ける少女がいた。少女の名はアイシア。俺が愛した少女。アイシアは俺に告げる…

D・C・?、アイシアルートの二次創作作品です。一部ネタバレ、憑依系が嫌いな人はブラウザバックをお願いします

第1話【消失と融合】（前書き）

文章に変なところがありましたらすみません m (| (m

第1話【消失と融合】

…俺の存在が消える…

…俺は本来いないはずの存在…だから仕方ない…のかもしれない…

混濁した意識のなか、必至に繋ぎ止める何かがある…

？「義之くん！意識をしっかりと保って！」

『…………アイシア？』

消えかけた意識を集中させると、さくらさんと同じくらいの小柄な少女…アイシアが泣きながら訴えかけていた。

1ヶ月前に出会い、一目で魅了された不思議な雰囲気の少女。

他の人達の記憶に残らない少女…そんな儚げな雰囲気を一切感じさせない、明朗な性格の少女…

「義之くん！諦めちゃだめ！」

『だが…俺は…もう…』

アイシアのおかげで何とか意識は保つことができたが、俺は既に消えかけていた。

「…………義之くん、よく聞いて」

意を決した表情をしながらアイシアが告げる。

「今からわたしの魔法で義之とわたしの存在を融合させる」

「…え？」

にわかに信じがたい話だ。

俺とアイシアが融合？

「なん…で…そんな…」

「義之くんは身体ごと全部存在が消える。でもわたしは身体はあるけど存在しないようなもののなの。だから、魔法でわたしと義之くんを融合したほうがいいの」

「でも…そんな…こと…したら…」

「あまり喋らないで。大丈夫、義之くん。義之くんは消えないよ。文字どおり融合…わたしの身体に義之くんの意識が宿るの。…わたしの身体じゃ嫌かもしれないけど」

あははとアイシアは苦笑いする

「そんなこと…ない…！それよりも…アイシアは…それでいい…のか？」

「いいよ。友達のいないわたしが残るより、たくさんの友達に囲まれた義之くんが残るほうがいいもの。…わたしの身体、好きなように使っていいからね？」

『だめだ…そんなことしたら…アイシアが…!』

「違うよ。わたしと義之くんは1つになるの。そう思ったほうがきつといいよ」

『アイ…シア…』

涙を溜めた満面の笑みを最後に俺は意識を深く沈めていった…

続く

第2話【事実と驚愕】（前書き）

芳乃さくら初登場。

第2話【事実と驚愕】

『…ん…ん…』

俺はゆっくり目を覚ますとさくらさんが俺を見下ろしていた。

さくら「義之くん、気がついた？」

穏やかだが、やや悲しげな笑みを浮かべてさくらさんが話しかける。

『さくらさん…俺…』

なんだか妙な感じがする。声も変…というか聞き覚えがあるような。

さくら「そういうことは貴女は義之くんで間違いないんだね？」

悲しげなような…嬉しげなような…複雑な表情で尋ねてくる。

『俺は俺ですよ。何を言っ…』

俺はさらに違和感を覚える。俺から発する声は少女のようなソプラノボイスだ

さくら「あのね…義之くん。今からボクが話すことをよく聞いて」

さくらさんが真剣な表情になりながら俺の身体を起こす。

あれ？さくらさんの手が大きく…

さくら「今の義之くんは義之くんであって、義之くんじゃないの」

『…言ってる意味がわかりませんが…』

俺は顔を傾ける。目線も何故かさくらさんと同じ高さだ。

さくら「順を追って説明するね。義之くんはボクが枯れない桜に願った理想の存在。…そしてその桜は枯れてしまった」

俺は無言で頷く

さくら「そして桜が枯れたことにより造られた存在の義之くんは消えかけた。そこまではわかるよね？」

俺は再び頷く

さくら「でも消えてない。何故だかわかる？」

『それは…』

先程から感じる妙な違和感。

嫌な予感がする

さくら「…………アイシアの魔法で義之くんの存在は固定化されたの。…でもね、魔法で固定化出来たのは義之くんの意識だけ。そして魔法の代償として…」

予感が確信になる

さくら「アイシアは自分の身体に義之くんの意識を移して…自信の意識は消失したの」

『そんな…』

アイシアの声で愕然とする。

さくら「ボクにはどうしようもなかった…2人一緒には助けられなかったの…」

さくらさんが涙を流しながら俺の両肩に手を置くと視線を落とした

さくら「ほんとに……ゴメン……ね……」

布団にポツポツの涙の跡がつく

『さくらさんは悪くないですよ……』

さくら「うつん、ボクが…」

言いかけて口をつぐむ。

”ボクが義之くんの存在を願ってしまったから。”

それを俺自身に言いたくないからだろう。

ポロポロ泣きながら視線を落とすさくらさんの頭に俺はそっと手を乗せた

白くて小さな手…俺はアイシアになったんだと再認識する。

『俺は嬉しいですよ。さくらさんのおかげで俺は存在して…アイシ

アと出会えたんですから』

さくら「…え？」

瞳を潤ませた表情を俺に向ける

『それに…こう思うことにしたんです。アイシアは俺と一緒にいるんだって』

目を伏せて思いを馳せるように話す

さくら「義之くん…」

『どちらにしても俺は消えるところだったんです。だから俺は桜内義之である前にアイシアとして生きていくつもりです』

さくら「義之くん…」

さくらさんは涙を拭いながらどこかホッとしたような表情になる

『でも、実際のところどうなってるんですか？俺は消える前、ほとんどの人に忘れられていたんですけど』

さくら「確証はないけど、今までの義之くんの存在はなかったものとして、そのままアイシアに置き換えられてると思う…」

『それって…』

さくら「うん、小恋ちゃんも義之くんじゃなくてアイシアを幼馴染みだと思ってるだろうし、他のみんなもアイシアがクラスメイトだと認識してると思う」

俺は無言でさくらの説明を聞く。

じゃあ…義之としての認識があるのはさくらさんだけ…

さくら「でもね、例外もあるの。まだ確認していないから自信ないけど、ボクみたいな魔法使いや…特別な能力をもった人なら…説明すれば…」

それって…

さくらさんが俺の表情を見て思ったことを察したのか真剣な表情をしゅっくり告げる。

さくら「うん。音姫ちゃんと由夢ちゃん。2人なら義之くんのことを忘れてないと思う」

続く

第3話【遭遇と疑惑】（前書き）

朝倉姉妹初登場。

第3話【遭遇と疑惑】

『え？音姉はわかるとして、なんで由夢が？』

俺は顔を傾げる。音姉は魔法使いだからわかるけど、由夢は違うはず…

さくら「たしかに由夢ちゃんは魔法使いとしての力はないけど、特別な能力ちからを持つてるよ。…そう言えばお兄ちゃんもあつたっけ…」

さくらさんが感慨深げな目をして中空を見つめる。

さくらさんが”お兄ちゃん”と呼称するのは音姉達の祖父である、純一さんだ。

そう言えば俺が使えるただ1つの魔法も純一さんから教わったんだっけ。

俺は何気なく小さな白い手の平を眺める。軽く握って、和菓子イメージする。

それから開くがそこには和菓子どころか何もなかった。

さくら「義之くん。出せなくて当たり前だよ。今の義之くんはアイシアなんだから」

『やっぱりダメかあ。あ、でも玩具なら出せるんじゃない？』

さくら「たしかにアイシアなら出せるけど、和菓子とじゃ魔法の構

造が違うから今は出来ないと思うよ」

『そうなんですか？』

さくら「うん。一口に物を出す魔法と言っても術式が違うからね」

さくら「アイシアの知識と経験が定着するまでは無理しないほうがいいよ。あの娘もボクと同じくらいの力のある魔法使いなんだから」

たしかにな…じゃないと俺の意識を自分の身体に移すなんて真似できっこない。

さくら「あとは…義之くんさえ気を付ければそのまま問題なく学園に通えるよ」

『あ、でも制服とかは』

さくら「それも大丈夫。世界の認識と改変が出来てるから、アイシアとしての義之くんは風見学園附属の三年生だよ」

何だか便利なんだかそうでないんだか…

俺が苦笑いしていると

？「弟くん！朝だよ！」

？「兄さん！起きてますか？！」

音姉と由夢が芳乃家にやって来て居間に向かっていく

ちなみに俺とさくらさんがいるのはさくらさんの寝室だ。後から聞いた話だと、いくらアイシアの小柄な身体だろうと同じ背丈のさくらさんでは二階に運ぶのが大変だったからだ。

音姫「弟くんはまだ寝てるのかな？部屋にいつてましよう、由夢ちゃん！」

由夢「う、うん」

由夢の声がもっている。音姉の剣幕にひいてるのかな？

それからドタドタと音姉達が二階に上がっていく。

とりあえずどう現状を説明するか悩んでいると

音姫「な、なにこれ！弟くんの部屋が…！」

由夢「兄さんの部屋が女の子みたいな部屋に！」

何ですと？

さくら「それも世界の改変だろうね」

さくらさんがクスクス忍び笑いしていた

音姫「ま、まさか…他の女の子と同棲なんてことは…！」

音姉飛躍しすぎ。というかここまで声が届くなんてどんだけ大きく喋ってるんだよ

由夢「そん…にいさ…わけは…」

先程は聞こえたが、その後の由夢の言葉は途切れ途切れしか聞こえなかった。

まあ、普通は距離があるから聞こえなくて当然。つまりはそれだけ音姉が興奮してるということだ

音姫「さくらさん！弟くん知りませ…んか…」

いつの間に二階から降りてきたのか、唐突にさくらさんの寝室を開けて固まる音姉。

さくら「こら。部屋に入るときはノックしなきゃ」

1人冷静なさくらさんが注意する。

音姫「すみません…あの、この人は…？」

あ、そう言えば音姉はアイシアと面識なかったっけ。

さくら「…義之くんだよ。今は姿が変わってるけどね」

さくらさんはいきなり暴露した

続く

第4話【認識と無意識】（前書き）

現状説明の回。

第4話【認識と無意識】

さくら「この子は義之くんだよ。今は姿が変わってるし、詳しい説明は順を追って話すから、2人は居間で待っていてくれるかな？」

音姫「え…あ、はい」

矢継ぎ早に話したさくらさんに完全に驚くタイミングをなくしてしまった音姉は、半ば啞然としながら頷きヨロヨロと出ていく。

さくら「由夢ちゃんも、だよ」

由夢「…あ、はい」

音姉の後ろで目を見開いていた由夢が小さく頷いてから出ていく。

由夢はほんの僅かだがアイシアと面識がある（と言っても姿を見たただだが）

あの時の少女になっている俺に驚いているのだろう。

さくら「義之くん、もう動けそう？」

さくらさんが俺の顔を覗き込みながら尋ねる。

『…なんとか、大丈夫です』

俺はゆっくり立ち上がる。やはり目線がかなり低くて違和感がある。アイシアは俺と比べて30cm近く低いから当然かもしれないが…

『あ、服…』

さくら「アイシアが着てた服は酷く汚れてたから、代わりにボクの服を着せてあげたの」

勝手にしてごめんねと苦笑するさくらさん。

『いえ…まだアイシアの身体に慣れてませんから、有りがたいです』
今はアイシアの裸なんて直視出来ないだろうし。…まあ、一生アイシアの身体なのだからいずれは慣れないといけないが

さくら「そう…じゃあ行こうか？」

俺はさくらさんに連れだって歩き出した

さくら「…というわけでね、今は義之くんを認識出来るのはボクと音姫ちゃんと由夢ちゃんだけなんだよ。」

音姫「…そんな高度な魔法を駆使できるなんて、流石さくらさんの知り合いですね」

居間に着いてからひととおり説明を終えると音姉が心底感心したように呟く。

由夢「あの、つまり…他のみんなの記憶や思い出はアイシアさんに置き換えられてるということですか？」

さくら「由夢ちゃんご名答　だからね、他のみんなには最初から義

之くんは存在してなくて、アイシアとして知られているの。もちろん不都合のないようにね」

さくらさんがおどけつつもどこか寂しそうな表情で説明する

音姫「そんな… 弟くんが最初からいなかったなんて…」

音姉が顔面蒼白な状態になって俯く

さくら「でもね音姫ちゃん。たとえ他の人が覚えてなくても、ボクたちが義之くんを覚えてたらいんじゃないかな？」

俯く音姉にさくらさんは優しく語りかける

さくら「義之くんが完全にいなくなるよりはましだと思わない？」

さくらさんが穏やかに微笑む。

音姫「それは… そうですね…」

さくら「それに2人とも。呼び方には気を付けなきゃいけないよ？ 今はいいけど、他の人の前で” 弟くん ” だとか ” 兄さん ” って呼んだら大変だからね」

音姫「う… そうですね…」

由夢「わ、わかってますよ」

音姉は落ち込み、由夢はどこか照れたように視線を逸らした。

『普通に”弟くん”から”妹ちゃん”に、”兄さん”から”姉さん”に変えればいいんじゃないかな?』

「「そういう問題じゃないのよ(ですよ)」「2人がハモっている、なんで?」

2人の剣幕に見上げながらたじろぐ。

「「気持ちの問題です!!」」「

今度は一語一句違わずにハモる

さくら「まあまあ。いきなりは無理だろうし、家でも変えるとは言わないからさ。つまりはここにいない他の人や、学園内で呼び方を変えればいいだけだよ」

さくらさんが音姉達をたしなめる。

それからさくらさんの説明は小一時間ほど続いた。

要約するところだ。

まずは世界が”義之”としての俺を認識しておらず、”アイシア”として認識していること。

つまり、さくら・音姉・由夢を除く義之としての友人・知り合いが”アイシア”としての友人・知り合いだと認識していること。

もう1つは世界の改変。例えば俺の”義之”としての部屋ではなく、

”アイシア”としての部屋になつてること。

つまり性別的な不都合は全て置き換わつてるということだ

何はともあれ、前途多難であるが…アイシアがくれた命だ。大事に大切に過ごしていくつもりだ

俺は今後起きるであろう様々な出来事に思いを馳せていた

続く

第4話【認識と無意識】（後書き）

次話は雪月花が登場予定。

変更があるかもしれませんが

第5話【邂逅と新生活】（前書き）

現状整理の回。

更新が大変遅れて申し訳ありません

第5話【邂逅と新生活】

さくら「さあこの話は終わり！みんな揃ってるし、朝食にしようか」

さくらさんがパンツ！と手を叩いて話を終わらせて食事にしようと呼ぶ

「じゃあ簡単なのを「待つて弟くん」音姉？」

俺がトーストにでもしようかなと考えながら立ち上がろうとすると音姉の制止が掛かった

音姉「弟くんは休んでて…というかまだ制服を着替えてないじゃない」

「つつ…」

音姉の言葉にあまり思い出さくないことを思い出して言葉に詰まる。…着なきゃいけないんだよね…

音姉「当たり前でしょう？制服着ないと学園に行けないじゃない」

音姉が腰に手を当てて仁王立ちしながら怪訝そうな表情で言う。

「でも女子の制服なんて持ってないし」

俺は焦りつつ言い訳をする。そこで今まで黙っていた由夢が口を開いた。

由夢「制服なら兄さんの部屋にありましたよ。ご丁寧にも掛け
てある場所に」

なんですと？

さくら「さっき言わなかったっけ？世界は義之くんを”アイシア”
として認識してるから、制服も男子じゃなくて女子なんだよ？」

「そついえばそうだった…」

さくらさんの言葉に頂垂れる。そこでさくらさんは由夢に向き直り
ながらとんでもないことを言い出した。

さくら「由夢ちゃん、義之君の着替えを手伝ってあげて。ほら、
義之くん”は女子の制服は初めてなんだし」

由夢「はあ。かったるいですけど”姉さん”のためですからね」

由夢はしぶしぶ了承しつつもどこか楽しそうだった。

というか姉さんはやめろ。

音姫「いいな…私もおと…”妹ちゃん”の着替え手伝いたいな」

音姉が不満そうな表情をする

わざわざ言い直さんでも…

由夢「じゃあ行きますよ、” 姉さん”」

「姉さんはやめてくれ…」

先に行く由夢を半ば早足で追いかけながら反論した

由夢「まあ、見た目からだと私が年上に見えますけどね」

ほっとけ。

クスクス笑いながら由夢は俺の部屋のドアを開く。

「うわ…」

アイシアの趣味が反映されてるのか、俺の部屋はえらくファンシーな内装に変わっていた。細かい箇所には” 義之” だった頃の名残があるが、部屋自体はほぼ完全に年頃の女の子の部屋となっていた。ちなみに何故か壁にはギターが立て掛けてある。

これも” 義之” の頃の名残だ

由夢「私も初めて見たときは驚きましたよ。兄さんの部屋が全く別の部屋にかわってるんですから」

俺のほうが一ツクリだ

由夢「さ、話はここまでにして着替えましょうか」

「やっぱり着るんだな…」

由夢「当たり前ですよ。それに早くしないと朝ごはんの支度を済ま

せたお姉ちゃんが来ますよ？」

着替えを済る俺にニヤリと笑いながら脅す由夢。たしかに音姉なら由夢と違って色々弄りかねない…

「はぁ…わかったよ」

俺はどこかやりきれない気持ちを抱きつつ服を脱ぎ始める。ちなみに着ていたのはさくらさんの昔の服で、上はフリルがたくさん付いたブラウスに黒いミニスカートだ。

アイシアの身体の詳細があるせいか、スカートを履いているのに全く抵抗はなかった

それから服を脱ぎ去ると下には緑の縞パンと縞ではないが同色のブラ、それを覆う白いキャミソールが露になった

由夢「……………」

その様子を由夢が無表情でジーツと見ている。

「な、なんだよ？」

由夢「いえ、”兄さん”に女装趣味があるとは思わなかったのだから」

俺が照れながら尋ねるとあり得ない返答が返ってきた

「や、これはさくらさんが着せたんだからな？俺が率先して着たわけではないぞ?!」

由夢「分かってますよ、冗談です」

由夢は再びニヤリと笑った

俺はニヤニヤ笑う由夢の様子に軽くため息をつき、風見学園”女子”の制服に袖を通す。

「あれ…？」

なぜか違和感や苦勞することなく制服を着ることに成功する。これもアイシアの身体の記憶だろうか？

由夢「…私がいる意味ないじゃないですか」

由夢が一転して不機嫌さを露にする。たしかに由夢はさくらさんに俺の着替えの手伝いをするように命じられた。それなのに全く手伝うことなく俺1人で着たらそりゃ気分悪いだろう。だから

「えと…ごめんな、由夢」

由夢「…っ！？べ、別にいいですよ…かったるいことしなくて済みましたし…それより”兄さん”」

「ん？」

俺が由夢を見上げて申し訳なく謝ると由夢は一瞬顔を赤らめてから視線を逸らしつつ俺に尋ねてきた

由夢「……本当に元には戻れないんですか…？」

真剣な目を真っ直ぐに向けて絞り出すように問いかけてくる。

「……………」めん」

由夢「なんで兄さんが謝るんですか？今の状況は兄さんのせいではないでしょう？」

「でも俺が「兄さん」由夢？」

由夢「そこから先を言ったら怒りますよ？」

「由夢……」

由夢「…さあ！着替えは終わっ たんですよ、早く行きますよ」

やや頬を赤らめながら視線を逸らして由夢が出ていく

「あ、ああ」

それに慌ててついていき、居間に行くと朝なので軽く食べやすい料理が並んでいた。

音姫「さあ召し上げれ」

満面の笑みで料理を薦める音姉。相変わらず俺の分が多い…だけど。

「音姉、こんなに食べられないよ」

音姫「え？いつもの弟くんと同じ量…あ。」

苦笑いして遠慮する俺に不思議そうな表情をするが、ハツとした表情に変わる。どうやら気付いてくれたらしい

そう、今の俺はアイシアになっている。だから男の頃ならなんら問題ないが、アイシアみたいな小柄少女にはあきらかに過大な量なのだ

音姫「ごめんね弟くん これからは量を気を付けないといけないね」

「ごめんな、音姉…」

音姫「しょうがないよ。今の弟くんは”女の子”なんだから」

申し訳なさに謝る俺に音姉は女の子を強調して言った

さくら「ほら、それより早く食べないと。みんな遅刻しちゃうよ？」

さくらさんの言葉に俺達は慌てて食べ始める。やはり身体がアイシアになったせいかな、あまりたくさん食べられないな…

俺はこれから始まっていく日常に不安を募らせながらちびちびと咀嚼していた

続く

第5話【邂逅と新生活】（後書き）

次回の更新も遅れるかもしれませんが

第6話【友人と学園】（前書き）

ななかと小恋初登場の回。

今回は短いです

第6話【友人と学園】

俺達はなんとか朝食を済ませ、芳乃家を出た

音姫「どう？弟くん。」

「どうって？」

音姫「…女の子になつた感想は？」

唐突に音姉が問いかけてきたので顔を傾けると今度は顔を近づけてきて小声で再度尋ねてきた

「どうって言われても…あまり違和感ないかな。…これも魔法のおかげなのかも」

音姫「……………そっか」

由夢「……………」

俺が探るようにして感じた感想を述べると音姉は寂しげな表情をし、由夢は無言で何か言いたげな表情で見据えてきた。

??「おはよー、アイシア」

そんな気まずい雰囲気破るようにして聞き覚えのある声が響き渡ってきた

音姫「おはよー、小恋ちゃん」

由夢「おはようございます、小恋先輩」

音姉達とともに振り返ると”義之”時代からもはや見慣れた幼馴染み、月島小恋が立っていた。そこに俺が挨拶するより先に音姉が小恋と同じように明るく挨拶し、由夢が礼儀正しくクールに挨拶した

小恋「おはようございます、音姫先輩、おはよー、由夢ちゃん」

「…………おはよう、小恋」

小恋が音姉と由夢に挨拶した後、俺が緊張しながら挨拶すると不思議そうな表情になって顔を傾ける。

小恋「アイシアどうしたの？どこか具合悪い？」

「だ、大丈夫、平気」

小恋「そう？ならいいけど…」

心配げな表情で顔を近づけてきた小恋に焦りながら言うと、まだ心配げな表情のままだがとりあえず納得して離れた。…義之時代にはなかった態度だな…あつたら困るが。

それから専ら音姉と小恋が他愛もない世間話を始め、俺と由夢はそれを無言で眺めるといった流れで登校していく。

そしてとある十字路に差し掛かったその時、

???「おっはよー アイシア」

唐突に俺に飛びつく人物がいた

俺の知りうるかぎり、こんなフレンドリーなスキンシップを取る女子生徒は1人しかない。

「…………… ななか。苦しいんだけど」

ななか「もー、つれないなあ アイシアは」

俺がため息をつきながら言うと相変わらずの人懐っこい笑みを浮かべながら抱き締めてきた…む、胸が…胸が…！

小恋「おはよー ななか …… ってアイシアがもがいてるけど…」

ななか「おはよー 小恋 …… って、 わあっ！？」

俺が窒息寸前になっていると小恋がななかに挨拶してからつつこんできた…死ぬかと思った…

ななか「ごめんねー アイシアがあまりにも可愛くてつい…」

なんだかななかは相変わらずだなあ と苦笑い浮かべる。

小恋「そのへんについては私も同感だけど窒息死とかになりかねないから気をつけてね？」

ななか「はいはい」

小恋が困り顔で注意するとわかっているのかいないのか、ニコニコ笑顔で返事する。なんか小恋のキャラが変わっているような…

それからはやっぱり小恋の説教が通じていないななかを俺を後ろから抱きしめながら（非常に歩きづらい）歩き、小恋がそれを注意し、

音姉と由夢がひたすら苦笑いするという形で学園への道を進んでいた。

続く

第6話【友人と学園】（後書き）

更新スピードがなかなか上がらず、申し訳ありませんm（――）m

第7話【悪友と学園生活】（前書き）

杉並&板橋初登場。

試験的に1ページ千文字前後にしてみました。読みにくければ以前に戻しますので、感想にお願いしますm（――）m

第7話【悪友と学園生活】

ようやくななかの抱き付きから解放（流石に見かねた音姉に注意されると名残惜しげにしつつ離してくれた）され、ほどなくして学園が見えてきた。

??「おはよう諸君。相変わらず華やかだな」

唐突に後方から偉そうな声が聞こえてきた。まあ、こんな仰々しい話し方をするのは一人しかいないが…

「…おはよう、杉並。お前も相変わらずのようで」

杉並「フッフ、そう誉めるな」

「誉めてない」

俺が無愛想に言う和不敵な笑みを浮かべる。”義之”時代からの悪友の杉並だ。下の名前は知らん。というかアイツの下の名前はさくらさんの見た目と同じくらい風見学園の七不思議的な気がする。

音姫「おはよう、杉並くん。また何か企んでまゆきを困らせたらダメだよ？」

杉並「フフ…なんのことやら。勝手に高坂まゆきが付きまっとり来るだけだ。俺はまだ何もしていないぞ？」

音姫「”まだ”なんだ…」

音姉に注意されるも杉並の奴はニヤリと不敵に笑いながらはぐらす。確かにアイツは普段は対したことはしないが、学園祭などの大きなイベントでろくでもないことをやらかすためにまゆき先輩をはじめ、生徒会には要注意人物として挙げられている。

杉並「さて、俺はそろそろ行かせてもらおう！アディオス！」

杉並が再び偉そうに挨拶して颯爽と去っていく。…と、そのとき。

???「まてー！杉並ー！！」

去っていった杉並を追う人影。言うまでもなくまゆき先輩だ

音姫「おはよ、まゆき」

まゆき「ああ、おはよう音姫…って、杉並を引き留めてくれないとダメじゃないっ！」

音姫「えゝ？私なんで怒られるの？」

それはごもつとも。

音姫「杉並くん”やつぱり”何かしでかしたの？」

確定事項か。まあ奴ならやりかねんが

まゆき「あいつ放送室にふしだらな物を放送しようとしたのよ」

そう言ってまゆき先輩は没収したR - 18指定なブツを音姉に見せる。あ、嫌な予感

音姫「…え、え…」

まゆき「音姫？」

「音姉？」

フルフルと震える音姉。

音姫「えっちなのはいけませーん！！」

まゆき「うわっ！？」

「ひう！！」

突然音姉が激昂し俺とまゆき先輩を放置していつもの三倍（俺的主観）で杉並が去った方向へ猛ダッシュしていった。ちなみに由夢は「やっぱり…」と言わんばかりの呆れ顔、ななかと小恋はポカーンと目を丸くしている。俺は思わずアイシアの幼い声で悲鳴を上げちゃった…

まゆき「ちょ、音姫！待ってって！」

いち早く再起動したまゆき先輩が走り出すが、すぐにこちらを振り返ると苦笑いし

まゆき「じゃあ妹ちゃんに妹くん、またねっ！」

と言って音姉（暴走ver）を追いかけていった。

そうか…” 義之” 時代は『弟くん』だったが今はアイシアになつて
るし、『妹くん』だと由夢と被るから『妹ちゃん』なのか…

深くため息をつく俺を見て笑いを堪える由夢。にやろつ。覚えてる
よ…

閑話休題

俺は下駄箱で由夢と別れ、ななかと小恋とともに自分の上履きの元
へ向かう。

小恋「アイシア？こつちだよ？」

「あ、そっか」

ななか「もーアイシアはドジっ娘だな。そこがまたいいんだけど
」

俺が思わず男子生徒側の下駄箱に向かうとして小恋に不思議そう
な顔をしながら止められる。苦笑しながら小恋達の元へ向かうとな
なかが二ヘラっつと締まりのない笑顔（口が猫みたいな感じ）を向
けながら抱き付いてくる。

その態度に苦笑いしつつ【アイシア】とプレートが貼られた下駄箱
を開ける。やはりというかなんというか…俺の上履きは女子のデザ
インに小柄なアイシアのサイズに合わせた物に変わっていた。

…もう慣れたけどね…はあ…

？「おおゝつす！3人供」

そんなおり、俺達に声を掛けてくるところか軽薄そうな口調の人物。

小恋「おはよう、渉君」

ななか「おはよう板橋くん」

「…おはよう、渉」

俺の”義之”時代からの悪友その2、板橋渉だ。

渉「うん、やっぱり華やかだね」。誰か俺と付き合いわない？」

小恋「ごめんね渉くん」

ななか「私はちよつとね」

「…キモッ」

渉「ガッン！！というかアイシアひどっ！」

三者三様な答えに愕然とする渉。外見がアイシアでも中身が義之なんだよ。誰が好き好んで渉と付き合っつての

ななか「でもそれがアイシアの萌えポイントなんだよ。どこがムスツとしていて無愛想なんだけど、それがいいっていうか」

といいながら再び抱き付くななか。すっかり抱き付きキャラになっ

ちまつたな…

由夢「先輩方。そろそろ教室に向かわないと遅刻しますよ？」

超猫かぶり状態の由夢がかなり冷めた目で見てから自分の教室に向かった。それに合わせてそそくさと教室に急ぐ俺達。

なんだか女になってからこんなばかりだなとふと思ってしまうアイシアとしての学園生活初日がスタートするのだった…

続く

第7話【悪友と学園生活】（後書き）

相変わらずの更新スピード激遅…謝ってばかりですが本当に申し訳ないです

言い訳をしますと、文章研究の為に他の作者様の作品にハマって読んでしまったり、リアルに仕事が忙しくなったりと書くモチベーションを上げられませんでした

とりあえず仕事も安定してきたのでなるべく早く更新していきたいと頑張りますので作品についてのご感想、これはこうしたらいいのでは？という意見があれば是非書いて下さいませ。

厚かましいお願いではありますが、それがモチベーション上昇につながり、更新スピードが上がるきっかけにもなりますのでどうかよろしくお願い致しますm（——）m

第8話【羞恥と混乱】（前編）（前書き）

雪月花勢揃い。

1ページに千文字近くだとかちゃごちゃして見づらいみたいですの
で、戻しました

第8話【羞恥と混乱】（前編）

教室にたどり着いた俺と小恋（ななかは別のクラスなので泣く泣く自分の教室に向かった…数分間くらい抱きしめられたが）はドアを開ける。やはりというかなんというか…特には注目されなかった。世界がアイシアを普通の女生徒と認識してる証拠らしい。

尤も、アイシアの容姿は普通の女生徒とはいいがたいが。

そんなどうでもいいことを考えていると、アイシア容姿の俺と同じくらい普通じゃない女生徒”2人”が近寄ってきた

？「…おはよ」

？「おはよ」

小恋「おはよう、杏、茜」

「…おはよう、杏に茜」

”義之”時代からの女友達、雪村杏と花咲茜だ

ちなみに隣にいる小恋と3人合わせて【雪月花】なんて呼ばれてたりする（雪村に月島に花咲だからだ）。

…そういえば、アイシアの容姿になってから杏との目線の高さがほとんど同じな気がする。それだけ杏も小柄だったというわけか

杏「…何、アイシア」

「別に」

杏「…そう」

杏は俺が見ていることに気付き無表情の視線を向ける。俺が素っ気なく返すとさして興味ないのか小恋達に視線を移した

茜「なんかさ、杏ちゃんにアイシアちゃんが並ぶとほとんど姉妹みたいだね」

小恋「うん、私もそう思う」

杏「…じゃあわたしが姉で」

茜と小恋が好き勝手に言い出す。

なんで杏が姉だよ…年齢的にはアイシア（元の持ち主）のほうが遥かに年上なのに。

とは言い出せず無愛想に見ていると茜が「ホントそっくり」と言いながら杏もろとも俺を抱きしめる。

今日はこんなばっかだ…

…それと、アイシアの身体の状態反射が知らないが茜の”普通じゃない”部分を見ると気が重くなる。

なんだか憎らしい

それから滞りなく1日が過ぎる…とおもいきや

小恋「アイシア？次の授業は体育だから更衣室にいく？」

………なんですと？

続く

第8話【羞恥と混乱】（前編）（後書き）

今回サブタイが前後編です

理由はサブタイのネタが切れたので（- - ;）

第9話【羞恥と混乱】（後編）（前書き）

魅惑の着替えシーン？

過度の期待は禁物です（笑）

第9話【羞恥と混乱】（後編）

女子更衣室。

そう、女子更衣室である。今の俺はアイシアなんだから体操服に着替えるのに利用するのは当然であって…

小恋「アイシア？どうしたの？」

「え？ああ、うん、何でもない何でもない」

小恋「そう？」

ただいま絶賛混乱中。いくらアイシアの身体で女性のハダカに馴れたとはいえやはり精神は”義之”なわけで。

つまりなにが言いたいかと言うと…

男にとっては夢のパラダイスが広がっていた

涉なら鼻血を出して喜ぶところだろう…確実に

茜「ア・イ・シ・ア・ちゃん」

「はうわ!？」

唐突に後頭部に二つのバレーボール もとい、茜の”普通じゃない”部分が押し付けられる

……… はっ！？一瞬意識が飛んでいたようだ

茜「どうしたの？着替えないの… はっ！？もしかしてアノ日なの？！」

「いやいや、違うから」

妙な勘違いをする茜に苦笑いを浮かべる。…アノ日ね…。女の子でいる以上はいつかは避けて通れない道だ。せめてなったときに慌てないように知識とか必要な物を用意しといたほうがいいかもな…

杏「…どうせ劣等感を感じてるんでしょう？茜がそんなもの押し付けるから」

と、ニヤリと不敵な笑いを浮かべたあと再び自分の着替えに戻った杏を見ると何故か気が軽くなる…似たような体型のせいだな、うん。

杏「………今失礼なこと考えなかった？」

「いや、なにも」

急に杏が疑いの眼差しを向けてくる。俺は視線を反らすと杏はどこか眠そうな目を細めてジッと見てくる

怖いって…

それから俺はこれ以上渋っているとあらぬ疑いをかけられそう（レズだとか…というか精神は男なので中身は正常だが）なのでなるべく周りを見ないようにして手早く着替えた。

その際に、小恋が隣で着替えるものだから小恋の”アンデスメロン”が視界の端に入って必死に記憶のデリートしたり（具体的には自分のを見て上書き）、茜が真っ正面から”柔らかいバレーボール”を見せつけてきたり（そのときは自殺しそうなくらい気が重くなっただけ…アイシアの身体の条件反射？）して慌ただしい着替えが終了した。

また制服に着替えるときにひと悶着あるんだろうか…ああ、気が重
い…

続く

第9話【羞恥と混乱】（後編）（後書き）

お昼に続いたの1日二話更新。

再びスランプ気味なので言い回しが可笑しいかもしれないですm

——）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4875m/>

D.C.?.E.F.～ダ・カーポ?.エターナル・フォーエバー

2011年10月7日11時02分発行